

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-29

【図書紹介】『終わりになきデリダ ハイデ
ガー、サルトル、レヴィナスとの対話』（齋
藤元紀・澤田直・他編、二〇一六年、法政大
学出版局）

Yamamoto, Eisuke / 山本, 英輔

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

74

(終了ページ / End Page)

74

(発行年 / Year)

2018-03-20

【図書紹介】

『終わりなきデリダ ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』

(齋藤元紀・澤田直・他編、二〇一六年、法政大学出版局)

山本 英輔

デリダは一九八〇年代の日本において、間違いなく現代思想のスターであった。私が学部生時代、教養部の柄谷行人がジョナサン・カラーの『ディコンストラクション』を教科書にデリダを語っていたことを今でも想起する。当時はデリダが一種の流行思想のようなものであったが、二〇〇四年に彼が没して、それから十年以上たつても、彼の思想は今もって私たちに問いを喚起し、思考を促し続けるものとなっている。終わりなきデリダ！まさに本書がそのことを証していると言ってもよいだろう。

この本は、二〇一三年に発足した脱構築研究会が他の研究会と合同で行った二つのワークショップがもとになっている。一つはハイデガー研究会とレヴィナス研究会との共催「デリダ×ハイデガー×レヴィナス」(二〇一四年)であり、もう一つは日本サルトル学会との共催「サルトル／デリダ」(二〇一四年)である。本会会員の齋藤元紀氏と澤田

直氏がそれらに携わり、編者として出版に尽力された。

この本では、「出来事を語ることのある種の不可能な可能性」というデリダのテキストが翻訳されて、これが導入となっている。このテキストは、一九九七年にカナダのモントリオールで行われた講演原稿で、まさに語る人デリダがそこに現われているかのようである。難解なデリダの通常の論文に比べて、とても読みやすい。「感謝は贈与を無効にします」「私がただ赦しうるものだけを許すなら、私は何も赦していません」。こうした言葉を繋ぎながら「贈与」や「赦し」の問題から、出来事の可能性／不可能性の問題を展開していく。これぞデリダである。

本書の構成は、このテキストの後、三部構成となり、第一部が「デリダ×ハイデガー」、第二部が「デリダ×サルトル」、そして第三部が「デリダ×レヴィナス」である。

合計一四本もの論文が掲載されていて、いずれもしっかりとした研究論文である。これらの論考群に統一性を持たすために動物論が配置され本書の特徴を作っているが、それだけでなく、暴力や文学、現前性や他者などなど、議論が立体交差するのも印象深い。デリダと三人の思想家、そして一四人の論文執筆者、そしてさらに私たち読者が、終わりなき対話をする事、そして「問いを提起すること」へと、本書は呼びかけている。